



柳田 耕治

YANAGIDA Koji

梓設計
常務取締役執行役員

建築を通じて感じる 関西パワー



私は25年前の4年間と直近5年の2度、大阪で勤務しています。職業柄、街並みや建築物をよく観察するのですが、建築の視点から見ると、大阪を中心とした関西圏には、25年前と現在とでは、かなり違いがあるように感じています。

初めて大阪に勤務した時、地下鉄御堂筋線の駅の天井を飾る照明を見て、「これが大阪か」と衝撃を受けました。機能性やコストを考えて蛍光灯を使用しているのは東京や名古屋でも同様でしたが、それを束にしてシャンデリア風に吊っていたのです。また、洋風建築の頂部の装飾をコーニスといいます。一般的にはシンプルに、主張のない形にすることが多く、ハービスOSAKAなどに見られる丸や三角といった個性的な形は、ほかではまず見られません。当社が設計した建物の中にも、例えば、阪神高速道路が貫通しているビルが梅田にありますが、これも普通では考えられないような建築方法です。

このような個性は外観だけにとどまるものではありません。高速道路をまたいでツインタワーをブリッジでつないだ阪神高速道路湾岸線の泉大津パーキングエリアも当社が設計を手掛けたものですが、タワー内にオフィスやホテル、展望施設までもが入る、このような複合的なパーキングエリアは当時ほかにありませんでした。他地域に見られないようなものを全国に先駆けて生み出すのが大阪・関西であり、建築やまちづくりに対する関西パワーが強烈に印象に残りました。

ところが昨今、そうした関西パワーを感じる建築やまちづくりが少なくなっているように感じます。関西のアイデンティティーが薄まっているというのか、どこの街にも見られるような風景が広がりつつあることがとても残念です。

街の風景に個性をもたらすもの、それはやはり「人」です。また、良い意味での自己主張が、街の風景に個性を生み出すパワーの源となります。機能的には無駄に思えるものであっても、それがあって人の心に響いたり、原風景として残ることは確かにあります。それは、数字や理論では語ることはできないものです。その良い例が、大阪・梅田の地下街でしょう。あの、一見わかりにくい、ゴチャゴチャ感こそが大阪らしさではないでしょうか。それを、不便だからといって整理してしまうと、個性がなくなってしまいます。現在、うめきた2期の開発に向けた動きが進んでいますが、ぜひ大阪の人に陣頭指揮をとっていただき、大阪らしいまちづくりが実現されることを期待しています。

関東圏は東京と一体化しており、一極集中することによるパワーを発揮している反面、画一的でおもしろみに欠けるように思います。一方、関西には多様性があり、各府県がそれぞれに異なるアイデンティティーを持っています。各府県がそのアイデンティティーを大切に、その上で切磋琢磨することにより、相乗効果を生み出すことができる、それが関西の強さです。

地域の活性化が日本全体の課題になり、また世界に目を転じて、グローバリズムが進むほどローカリズムの大切さが説かれる時代です。各府県の、そして関西としてのアイデンティティーに立ち返り、建築やまちづくりをはじめ、さまざまな分野において関西パワーが発揮されるよう願っています。

(談)